

# 原爆文学研究会報

第一三三号

原爆文学研究会 二〇〇五年二月

「戦後六〇年を問う」ことを問う 今年には戦後六〇年を意識して、さまざまなメディアで戦後を問い直すという企画がなされている。その中で「国民の歴史」を物語り、改めて記憶の一体化をうながすようなことも起こるだろう。TVや新聞や雑誌が、戦後に起こった出来事を共同の体験として記憶させる装置として機能する側面があることは、否定できない。

そのようななか、テッサ・モーリス・スズキが『過去は死なない』（二〇〇四年八月、岩波書店）の中で示している「歴史の真実」ではなく「歴史への真摯さ」の必要性という思考は示唆的である。公的文書や専門書の他、歴史小説や写真、映画、漫画、マルチメディア等によってもたらされる情報によって自分がどのような歴史観を形づくっているのか、どのような形で記憶を共有しようとしているのか、それを（社会的・空間的位置を異にする他者の見解に関わることで、過去についての自分の理解をかたちづくり、またつくりなおす、という継続的な対話）を通じてとらえるという「歴史への真摯さ」は重要だと思う。

「国民の歴史」を共有することの裏面には異なる歴史解釈の排除や不可視化がつきまとう。そのことに自覚的であろうとするとき、「戦後六〇年を問う」ことを問う、という問いが念頭に浮かぶ。無論こ

の問いは「原爆文学」を論じるときにも、論じることの意味を考えるときにも必要な視点になるだろう。（中野 和典）

## 第一三三回 原爆文学研究会報告

二〇〇四年二月一八日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第一三三回原爆文学研究会」には約三〇名が集いました。

石川氏の発表については、原爆と強姦のイメージの関係についての質疑や川上宗薫の小説における解放感と強姦する側／される側関係の変容とはどのようなに関わるのかという問題をめぐる質疑がありました。

内田氏の発表については、平和運動は不毛なのか、それを批判的に描く小説を政治と文学という視点からとらえるのかどのような問題が見えてくるのか等についての質疑がありました。



## 原爆とエロス「生の衝動」

——川上宗薫の自伝的小説をめぐって

石川 巧

長崎の原子爆弾で母と二人の妹を失った川上宗薫は、その後、九州大学を卒業して高校の英語教師になり、昭和二十七年頃から同人誌に自伝的小説を書きはじめる。だが、五回にわたって芥川賞候補になったものの、結局、受賞にはいたらず、やがてハイティーン向けのジュニア小説作家に転身したのち、昭和四十三年頃からはポルノ小説の分野で活躍。「失神派」とよばれる流行作家になる。

ちようど、川上宗薫が自伝的小説を書いていた頃、アメリカがヒキ二環礁で行った水爆実験によつて第五福竜丸が死の灰を浴び、原爆症に冒された乗組員の様態などをめぐってマスコミは放射能被害の怖ろしさを大きく報道する（事件は昭和二十九年三月一日）。日本全国に反核運動の輪が広がり、その揺り返しとして原子エネルギーの平和利用を唱える声も高まりをみせる。

発表では、この事件を「被爆体験を（見る）体験」ととらえ、川上宗薫が自伝的小説のなかで描く被爆後の長崎の光景が、昭和三十年前後にすすめられる原爆被爆者の法令化や、生き残った人々の恋愛・結婚・出産にともなう不安や差別の実態と接続していたことを論じた。

具体的には、①「ビショップの輪」に象徴される原爆のロマン化、

②「今生きている」という理由によつて、つねに「今」を追憶的なものとしてしか認識できない生存者の姿、③「死」を記憶としてではなく「とめどなく……し続けるもの」として描いていく方法、④経験の「量」や悲劇の「重さ」として体験を証言することへの嫌悪、④「大きな声」をあげたものが勝利する論理を不信に思いつつ、同時に、「意見を統一しようとする」とにも与しない姿勢、⑤被爆者を社会的な「弱者」として固定し、彼らをフィクションの題材にして玩ぶときに用いられる「強姦」のメタファーと世間から隠蔽される被爆者たち、⑥売春防止法（昭和三十一年）、赤線廃止（昭和三十三年）と続くセックスの管理とそれに挟まれるようにして成立する原爆被爆者医療法によつて、売春行為と被爆問題がシンクロしていく構造（＝家族を主体として再構築されるモラル）などについて、「企み」（『文学界』昭和三十年二月）、「或る目ざめ」（『群像』昭和三十年六月）、「傾斜面」（『群像』昭和三十年十月）、「怒りの顛末」（『文学界』昭和三十年十一月）、「夏の末」（昭和三十一年八月）、「残存者」（『文芸』昭和三十一年十二月）などの自伝的小説の記述に即して考察した。そのうえで、「悲劇」としての語りがいかに人間の不幸を集積し、組み立てるだけでなく、それを必要性、英知、浄化のかたちにかえて正当化しようとする機能をもつてしまうかという問題を提起し、川上宗薫は、そうした「悲劇的蘇生」を拒絶し、悲劇に屈服しないための技術的方法を探った作家だった（それゆえに自伝的小説からポルノ小説への轉身を果たしていく）と結論づけた。

# 平和運動の描かれ方

— 〈原爆文学〉の中で —

内田 友子

なぜ、小説の中の〈平和運動〉はいつも批判的、懐疑的に描かれるのか。

これが今回の発表の関心だ。〈平和運動〉（戦争反対のデモや署名などの所謂「運動」に限らず、セレモニー、語り部の活動、資料館、石碑等々、体験や記憶の継承に関わるすべてのもの）とは、何かそんなに疑わしいことなのか？

という素朴な疑問が、原爆を題材とする小説を読んでいると募ってくる。もつと丁寧というなら、学校や新聞やニュースでは必要ないこととして位置づけられるそれらが、小説の中では何となく疑わしく描かれる、その乖離の原因は何だろう、という疑問だ。この乖離は、たとえば、体験者とそうでない者の間に横たわる溝、という説明のしかたで片付くのか。あるいは、〈運動〉と〈文学〉とは別次元だから、という説明のしかたでおさまるのか。

特に長編小説では、被爆や従軍の体験を持つ登場人物たちが〈平和運動〉のありかたをめぐって見解や議論を延々展開するという場面がよくある。今回の発表では、たとえば、「平和公園」——（略）この町で「平和」とは、なんとも異質な、棒をでも呑んだような違和感の感じられることば」（堀田善衛「審判」という感覚、あるいは、「生き残った人間が平和平和と叫んでいるのを、あなたたちはまだ生きているのかと（原爆で亡くなった人たちは——内田注）訊いているに違いない」（福永武彦「死の島」という吐露、また、平和祈念式典に参加する若者たちを前にして、「女は嬉しかった。だから女は動かない自分に焦燥を感じていた。それでいて女は、若者や街の熱気に躊躇

踏していた」（林京子「無きが如き」という困惑などを紹介した）

いくつかの作品を通して発表者は、〈平和運動〉には明確な着地点（達成点がないということに、今さらながら気づいた。〈文学〉では、どうやらこれが疑わしさの矢面に立たされていようだ。では、被爆（戦争）体験者たちを満足させ納得させるものと、〈平和運動〉との接点とは、いったい何か。政治的な絡みからの考察は、今回あえて避けた。もつと根本的な問題がそこにあると思うからだ。

そもそも彼等が満足し納得するものとは、何だろう。これは、時間を戦前へ戻すリセットボタンを探す発想に等しくはないか。あるいは現在、〈平和〉を現実的側面から明確に説明できる者は、いるだろうか。少なくとも発表者は首をひねる。着地点のなさ、このあたりから立ちのぼる（発表の中では「不毛性」ということばを使ったため、含意をきちんと伝えられなかったように思います）。

質疑応答の中で、〈平和運動〉とはそもそも続けることに重点があり、着地点を定める性質のものではないのでは、という指摘もあった。現状を鑑みれば、異議はない。しかしその定義には、はじめから何かが倒錯しているような覚束無さも拭えない。着地点がないことに対して、私たちが慣れているのだとしたらどうだろう。さらには、その慣れを苦々しく見ている〈文学〉の言説そのものが、一方でその着地点のなさを自明のものに仕立てる役割を凶らずも担ってきたのではないだろうか。このような見取り図を、発表では「有徴化」ということばで説明しようと試みたが、考察の詰めの甘さから、うまくいかなかった。再度熟考したい。

〈平和〉ということばにともなう疑わしさはいったいどこからくるのか、というざいぶん抽象的な問題について、今回の発表ではわじぶかみに集めた資料をなかば参加者へ向かって投げつける形（の発表内容）となりましたが、みなさんからの辛抱強いご指摘により、焦点を取捨選択することができたように思います。この場をお借りしてお礼申し上げます。

## 彙報

### 第二三回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇四年一月一八日(土) 一三時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟1F101号室
- 内容 研究発表

原爆とエロス「生の衝動」

——川上宗薫の自伝的小説をめぐって

石川 巧

平和運動の描かれ方

——〈原爆文学〉の中で——

内田 友子

## 編集後記

第一三回研究会は、これまでより一時間繰り上げて一三時から開催した。そのおかげで質疑の時間をいつもよりは長くとることができ、石川、内田両氏の研究発表についての質疑もより実りあるものになったと思う。

石川氏の発表に続く質疑で印象的だったのは、戦後の占領国・米  
国と被占領国・日本との関係が、男女の図式でとらえられることが  
あるが、その図式と原爆とがどのような形で関係づけられるのか、  
ということだ。参加者の一人が、川上宗薫の小説が米国と日本関係  
を捉えるに使われる「強姦の隠喩」<sup>メタフォア</sup>を超え出ているのか、それとも  
補強しているのか、もし補強しているだけだとすれば、あらためて

この小説について論じることの現実性<sup>アクトチュアリティ</sup>は頼りないものになってしま  
うのではないか、いう意味合いの発言をした。これに対して石川  
氏は、国家間の関係をとらえようとする図式には回収されない問題  
があると応答したように思う。川上宗薫が描く「解放」との関係も  
含め、今後考えてゆきたい問題である。

内田氏の発表に続く質疑で印象的だったのは、「平和運動」に明確  
な終着点が必要なのか、ということをめぐる議論であった。「平和運  
動」は心理的にも物理的にも生きることそのものに大きく重なって  
おり、そのような意味では、明確な目的や終着点がなくても日常が  
成立するのと同じように、「平和運動」も成り立ってしまう。内田氏  
としては終着点のない運動によって追究されるものであるがゆえに  
「平和」なる観念がますます疑わしいものに感じられる、というこ  
とになるのだろう。僕としては小説やエッセイにおいて、「平和運動」  
を突き飛ばす言説が、そのことによって何を保とうとしているのか、  
という問題が、依然気になってしかたがない。これもまた、今後考  
えてゆきたい。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒811-6520 福岡市中央区六本松4-2-1

九州大学大学院比較社会文化研究院 石川巧研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail [ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>